

音楽現代

2010. 1

クラシック音楽誌

◆東京ニューシテイ管弦楽団 第65回定期演奏会

「ピリオド奏法による交響作品への
アプローチ」「ブラームスシリーズ」
◆と題され、指揮の内藤彰が力説
する、派手なヴィブラートを抑制す
るピリオド奏法を生かしてのコンサ

ート。この奏法は今日、かなり広ま
ってきており、この奏法でどれだけ
深く音楽を表現できるかが焦眉の急
を要する課題と言えるだろう。これ
に対して、たとえば弦では弓の速度
を緩急自在に変化させるなど様々な
工夫が必要で、まだ発展途上ではあ

るが、この日は多くの箇所です「なるほ
ど」と思わせる弓使い等によるユニ
クな響きが聴き取れた。最終的には
個々の楽員の表現意欲も強く問われる
だろう。前半のピアノ協奏曲第2番で
は独奏者が、谷川かつら急病のため中
井恒仁に変更されたが、中井は重厚か

つ真摯な演奏で問題なく代役を果たし
た。後半での交響曲第3番では強奏部
分でのアンサンブルが見事に揃っての
力強さが印象に残った。第3楽章など
一瞬、バロック舞曲を聴いているかの
新鮮な響きだった。(11月13日、東京
芸術劇場大ホール)
(茂木一衛)